



皆川泰藏え

## 簿記を教えることの

むずかしさ

川合安雄

簿記や会計学の答案をみていると、毎年  
のことながら、資本金や引当金が借方残高  
になるようなことを書いている答案があ  
る。簿記というものがまだ十分にわかっ  
ていない証拠であり、教師として情けなくも  
あり、ガツカリすることがある。

想

随

そうかと思うと、「会計学をもっと勉強  
したいから、良い参考書はないか」という  
殊勝な学生もいる。しかし、会計学をより  
深く研究するのもよいが、その前に基礎と  
なる簿記学を十分にマスターしておかな  
ければならない。簿記の理論を十分にや  
らずにいて、一足飛びに動態論がどうの  
かというのを見てみるのはナンセンス  
であり、それはちょうど習字でいえば、  
楷書をやらずにいきなり草書をやろう  
というもので、本末転倒であると思  
う。

それにしても、簿記学の勉強は学生には  
苦手らしい。これはわれわれ日本人の日常  
の計算思考が複式簿記の計算思考とあ  
わなないのも、一つの原因ではないかと思  
う。その点、アメリカ人は一般に日本人  
とは違った計算の仕方をする。第一、ソ  
ロバンというものがない。すべてが算  
筆である。買物をされておつりを出す  
場合でも、日本人ならば八〇円の買物  
をして百円札一枚を出せばおつりを二  
〇円くれる。この場合、百円から八〇  
円を差し引くと二〇円残るから、「ハイ」  
おつりは二〇円と出す。ところがアメリ  
カ人はそうではない。八〇円にい

くら足せば百円になるかによっておつり  
を計算する。つまり減算でなく加算で  
やる。前者は、簿記流に言えばシェ  
アール流の資本方程式であり、後  
者は、ニックリッシュ式の貸借対照  
表方程式である。

複式簿記の原理である「貸借平均の  
原理」には減算というものはなく、引  
く場合にはかならず反対側へ加えて平  
均さすのである。アメリカ人の日常生  
活にはすでに複式簿記の平衡思考がと  
け込んでいるように思う。アメリカ人  
と違って日本人に簿記を教えることの  
むずかしさは、案外こんなところに  
原因があるのではなからうか。

\*

さて、僕も明年はいよいよ定年である。  
定年になれば簿記教師としてこのよう  
な珍妙な答案はもう見なくてもすむわ  
けである。定年になって同志社からお暇  
が出たらそうして食うに困らなければ、  
読みたい本を読み、好きなヘボ書でも  
打って残生を楽みたいが、はたしてど  
うなることやら。秋の夜長にこんな  
ことを考えながら窓をあけると、草  
むらから虫の声がしきりに聞えてくる。  
彼岸前なのに世はもうすっかり秋の

氣配、そろそろ秋冷の候である。  
月かかる長等の山に虫しぐれ

## 私の誇る山

### 西 本 進

京都の比叡山、神戸の六甲山は関西の人々にとって懐しい山である。京阪神の大都会のすぐかたわらに比叡・六甲という名山が豊かに存在することはしあわせであり、私の生涯の山として誇りたい。

私が同志社大学経済科を卒業したのは昭和二年である。その頃の世の中は平穩で、思想のいらだたしさもなく、若者の私たちはいかにして青春を燃やすべきか、まことに楽しい時代であった。師弟の間柄は正しく礼節が守られながら、溢るる親しみがみちでいて、その雰囲気のなかで、私たちはそれぞれ自分の人格を築きあげていったのである。まことに幸福であった。

私は社会人となってから早や四十年にな

る。その大半はほとんど関西で勤務したのだから、比叡・六甲にたえず接することができた。もっとさかのぼると私は大阪の真ん中で生まれ、学生時代を大阪と京都で過ごしたから、私の生涯はこの二つの山と切り離すことができない。

もともと私は山が好きである。「山に登る楽しみは何か」について友人といくたびか論議したが、私は山に登ることは神に近づくことだと信じている。関西の山々はほとんど登りつくしたが、特に学生時代は比叡山を、社会人になってからは六甲山を幾度か登り、山のすみずみまで知っていたが、戦後山道や山上の設備が完備されるにつれて登山者が殺到し、人混みするようになってからは余り登らなくなった。それでもこの二つの山は好きだ。

京都の街から見あげる比叡山は堂々たる山の姿で、京都の守護にふさわしい。登山路は幾筋かあるが、白川道と修学院道がもっとも通俗的である。修学院道は白川道よりややけわしいが興味が深い。雲母坂の胸突き八丁を一直線に一気に駆け登り、山頂四明ヶ嶽で激しい呼吸をしたことが今でも

あざやかに印象に残っている。これらの登山路は今やケーブルカー、ドライブウェイが完備しているため、徒歩で登る人は少なくなつたことだらう。

山上からの眺望は非常に広い。正面に伊吹山、秋晴れの日にはその左右に加賀の白山、御嶽の白姿を望むことができる。丹波を脊負い、山城をくりのべ、琵琶湖を抱いた比叡山はまことに関西人の喜びである。

私は社会人になってからは六甲山を登りつづけた。山稜の構成は変化に富んでいて、全山花崗岩からなっている。俗に六甲六百谷といわれるほどに美しい谷をたくさん抱いている。山の南側は樹木が少なく、大阪湾に臨んだ眺望は素晴らしい。百万ドルの夜景と愛称され、人々に親しまれている。北側は比較的樹木が多くて深い山の気分を味合わせてくれる。

六甲山上は年々目ざましくひらけてゆくが、まだまだ自然の山膚に触れることができ、歩けば歩くほど六甲山のよさが湧いてくる。そしてこの山は関西に住む多くの人々にいつまでも愛され、また文化の山として世界に雄飛してゆくことだらう。

## 韓国の古い文化のことども

浅井啓三

去る九月、韓国のソウルを訪問した。

その節、国立音楽団による古典音楽を聞く機会を持った。何という曲であるのか聞くことができなかったが、琴、笛、胡弓の音色が、余韻<sup>しよじよ</sup>嫋々として、むせぶがごとく、泣くがごとく交錯する。私は夢幻の境に引き込まれながら、ふとその曲が「江差追分」に非常に近いということを感じるとともに、私の想像は自由の天地を駆けめぐるたことであつた。

古人は楽浪時代より、新羅、百濟、李朝と、この小国は大国の勢力に幾度か侵された。何時の時代であつたらうか。かつて高樓の奥深く仕え、高歌放吟に明け暮れた貴顕の宮人が、一朝にして厄にあひ、異国日本に難を逃れ、流浪の末に最果ての蝦夷の

地に安住の居を定め、朝に夕に北海の岸辺にたたずみ、涙しながら、遠い故郷の空を眺めて口ずさんだメロデー、それが「江差追分」の源流ではないだらうか。

「江差追分」は日本の民謡の傑作である。このような名曲が突然変異のように生まれ得たであらうか。なんらかの源流がなければならぬ。幻想は、私の心の中に、実存の響を残して去来するのである。

韓国には民謡が多い。文祿、慶長の頃、日本の侵略の当時、加藤清正をうらみに思い、その民族感情を訴えたのもあるといふ。

韓国と日本との交流は、仏教渡来の六世紀以来、或はそれ以前から、われわれの想像以上に密接であつたはずである。

日本の民謡の幾つかの源流が韓国にあつたということは充分ありそうなことである。あの法隆寺にしてからがそうである。世界最古の木造建築物として、すぐれた日本人の創造物であると思つている人々は少なくない。日本で作られたことに間違はないから、必ずしもそれが誤りであるわけではないが、この建築物の源流が韓国の法

住寺にあることは、韓国側の説明を待つまでもなく、その写真を見ただけでもうなずけることである。当時、仏教渡来とともに日本へやってきた多数の百濟人である建築技師やその子孫の指導によって、協力して構築された一種のイミテーションであることは疑いの余地がない。

私は韓国の博物館を訪れて、数々の優れた文化遺物を目のあたり見た。それ等の中に、金銅の半伽思惟像の二体が特に印象に残る。六、七〇センチもあるうか、日本にある御物、四十八体仏の中のあるものと、そっくりそのままではないか。百濟からの渡来か、それとも百濟人か或はその指導による日本での鑄造に違いない。

陶器の世界における新羅、高麗の影響、茶碗戦争の称さえある文祿、慶長の役後の磁器製作に対する革命的な出来事。——古代より中世への韓国による経済、文化的交流の跡をしのびながら、私は近代日本と韓国が友邦善隣関係により経済的、文化的発展に、相互に一層寄与するところあることを心より願わしいことに思つた次第である。

## 土倉翁の里

西川良一

七月の梅雨あけの半ば、奈良県の吉野郡の川上村の中学校へわたくしはPTAの講演を依頼されて足を運んだ。わたくしも同じ大和の産であるが南朝悲歌の里、吉野の大台ヶ原寄り、ということは大和の人間ならば山奥と僻地の代名詞的ローカルであることからして疎遠感が強い。それでもわたくしは吉野の山奥の大滝の里は土倉庄三郎翁の歴代の郷土であることを昔から知っていたのでその「兵ものどもの夢の跡」ならぬ「十万長者の夢の跡」を一度この目で確かめたためバスにゆられて奈良より三時間半、目ざす川上中学校の手前の大滝という部落の土倉翁の村へ着いたのは梅雨の降りしきる日下りであった。

子供るときから秋祭りに氏神の催しに舞う大和方言の獅子舞、いの役者が大和の長者

は「大槻(地名)の岡橋、奈良の木本、大滝の土倉」と狂言の文句はきまっけていて子供心のわたくしの耳をタコにしたことばでもある。

その大滝の村の国主(くにぬし)である土倉翁の家は今も吉野川の落ち合、ともいわれる水流の中ほどの迂回地点の頂点となっている山村であるが跡かたさえなく、ただ残っているのは激流、岩をかむところのその吉野川の対岸の岩の干置立ての絶壁に「土倉翁の碑」と刻んだ自然の風物誌的なよすがとバスの道すがらに淋しく建っている土倉庄三郎翁の瘦せた銅像のまことに勃然たる姿だけである。その土倉家の大尽、身上を知り、そのかみの明治初年に年額十数万円、山森収入を誇り、板垣退助をして金子二万円を与えて欧米視察の助け旅銀を惜みなく渡したその盛家を、今、わたくしはしばしのバスの休止を利用して同じ県下の者として、また一人の同志社人として土倉翁の肖像の前に立ち、その姿より求めようとすることも何も語ってくれなかった。ただ激流の若鮎おどる吉野川の流れの瀬音だけである。

土倉翁がわが同志社大学へ、創立者新島襄先生の乞いを入れて五千円の大枚を寄贈されたことは知る人ぞ知るのである。バスガールがこの道が明治の頭官、また新島襄が土倉翁に面会のため馬車を走らされてきた途だと説明してくれる。同志社のことについても、また幾多の献金、寄進、それにまつわる物語りは土倉祥子著『土倉庄三郎』でつまびらかにされている。

この意味では新島襄百年後の襄氏の門弟たるわれらも土倉翁の同志社に対する温情と理解と追憶と感激の念を捧げ、また同志社が天下に存在する限り大和・大滝の里の土倉翁の心情をわれわれの心の中に永く語りつたえ、言いつたえられるだけの価値をもたすべきであらうと思いつつ、私は川上の中学校を目指して走るバスの車中の人となって、かつては目と足のとどく限り土倉翁所有であった天にも摩する吉野山林、そして今は全く所者の変っているその山また山の杉と檜の道を、今も土倉家没落の真相と原因を大和の七不思議の一つと教えられていることに想を馳せつつ走っていたのであった。

(経済学部教授・商業経済論)